

山頭火ふるさと館報

第6号
令和3年3月

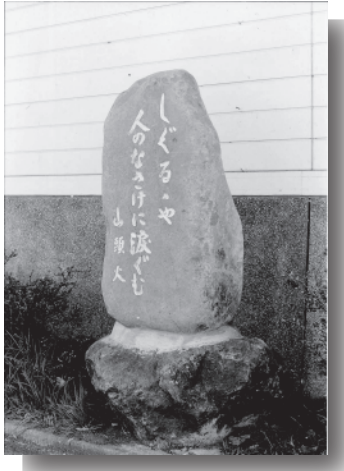
〽防府市の五十年後を見据えて〽 山頭火の魅力を発信し続ける

公益財団法人防府市文化振興財団
山頭火ふるさと館

館長 西田 稔

「いちにち雨ふり一隅を守つてゐた」
「しぐるゝや人のなさに涙ぐむ」
「あんたのことを考へつゞけて歩きつゞけて」
山頭火が大分県湯平で詠んだ昭和五年の句である。湯平は山頭火のお気に入りの温泉町の一つで、その時の日記に「この温泉はほんとうに気に入った、山もよく水もよい、湯は勿論よい、宿もよい・・・」と記している。山頭火は湯平では二泊しており、そこで十六句の自由律俳句を残した。
昨年の秋、私はその湯平温泉町にある山頭火ミュージアム時雨館を訪ねた。だが美しい

▼句碑（大分県由布市）
撮影：田原寛



山の中の温泉町は、その年九州を襲った集中豪雨で被災し、時雨館も破壊され中に入ることはできなかつた。
倒壊したままの宿もある中、湯平の石畳を照らす道沿いの灯籠には山頭火の句が照らし出され、たった二泊しかしなかつた山頭火であつたにもかかわらず彼を想う湯平の皆さんの心が伝わつてきたのを私は覚えてゐる。
山頭火は全国各地孤高の旅を続けながら、湯平でのように多くの句を作り残した。その数は八万を超えるともいわれ、今を生きる人の心を打つ句も多い。
「山頭火の魅力は？」と問われれば、彼の残した句は当然であるが、現代では真似できない彼の生き様もまた魅力であり、そんな人生を歩んだからこそ人の心を打つ魅力ある句が生まれたともいえよう。
かつては乞食坊主、防府市の恥と蔑まれ、生誕地防府では評価が低い山頭火であつたが、彼の魅力があらためて浮き彫りになってきて、近年山頭火や自由律俳句に親しむ若い人たちが特に学校で学ぶ児童生徒が増えてきたことは嬉しいことだ。
山頭火の人生まるごと負の部分も含めて全てを受け止めた時、その光と影がどう映るかはその人次第であるが、彼が多くの現代人に生きる力を与えているのもまた事実なのである。
山頭火ふるさと館がオープンして四年、開館以来これまで山頭火の魅力を発信し続けてきた。そして今や山頭火は防府市の恥から防府市の誇りになりつつあり、当館が防府市の

目次

館長挨拶	1
山頭火没後八十年記念シンポジウム	1
「旅する山頭火 終焉の地」	2
市内の山頭火顕彰活動	5
山頭火没後八十年記念企画展	5
「旅を記す 〽山頭火からの便り〽	6
企画展「俳句の中の生き物」	6
山頭火カルタで書き初め大会	7
消しゴムはんこ作り	7
令和二年度書道コンクール	8
山頭火・自由律句講座	8
第三回自由律俳句大会	9
寄稿	9
植田莫展	10
収蔵資料紹介	10
今月の一句アーカイブ	11
図書・資料受け入れ報告	11
山頭火ふるさと館 これまでの歩み	12

シティプライドとして市民の皆さんや全国の山頭火ファンに愛される文学館となつてきたことは大変喜ばしい。
来年度からはその山頭火ふるさと館の指定管理者が防府市文化振興財団から防府観光コンベンション協会に変わる。観光に軸足を置いた運営となるが、文化施設としてこれまで築いてきた様々な実績を継続するとともに、今後それらをさらに発展させて、この先五十年後防府市で育った子供たちが大人になった時に山頭火のことを心から誇りと思えるよう、正に真のシティプライドとなることを心から祈つてゐる。



山頭火没後八十年記念シンポジウム 旅する山頭火 終焉の地

日時…令和二年十月二十五日(日)
会場…防府天満宮 参集殿

◆パネラー

- 太田和博(まつやま山頭火倶楽部事務局長)
- 森克允(「放哉」南郷庵友の会幹事)
- 富永鳩山(書家・山頭火ふるさと会初代会長)
- ◆コーディネーター
西田稔(山頭火ふるさと館館長)

※当日の様子を一部抜粋してご紹介します。



西田 皆さんこんにちは。山頭火ふるさと館館長の西田です。

今年山頭火が亡くなって八十年という節目の年でございます。そこで、山頭火ふるさと館では、没後八十年に因んで、「旅する山頭火 終焉の地」と題し、昭和の芭蕉と言われた山頭火の旅や晩年についてパネラーの皆さんに語っていただき、本日お集まりの皆様とともに山頭火を偲びたいと思います。

最初に悲しい残念なお話ですが、今回、このシンポジウムを開催するにあたり、パネラー

としてご登壇いただくはずでしたが、窪田耕二様が八月十九日に急にお亡くなりになりました。

窪田様は、山頭火ふるさと会の会長として長年山頭火を顕彰され、当館の建設にも大変なご尽力をいただきました。窪田様に心から敬意と感謝の意を表すとともに平安な眠りにつかれますことをお祈りいたします。

さて、皆さんご存知の通り、山頭火はこの防府市で生まれましたけれども、亡くなったのは四国松山。大正十四年、四十四歳の時に出家得度して、五十八歳で往生していますが、故郷防府に帰ることなく漂泊の旅に生きた人でございました。今日はその山頭火の旅をテーマに、昭和十四年から十五年ごろの旅の中の山頭火のことに焦点を当ててみたいと思っています。

それでは、まずは最初にパネラーお一人ずつにご挨拶を頂きたいと思えます。

太田

みなさんこんにちは。今日の演題にもありますが、「旅する山頭火 終焉の地」の松山から参りました。

今年山頭火没後八十年。松山の山頭火について、少し話してご挨拶にさせていただきます。

昭和十四年十月一日に山頭火は「秋晴れひよいと四国へ渡つて来た」という形で松山にやってきました。

昭和十四年十二月十五日、松山知友の厚情に甘え、縁に随うて、当分、或は一生涯、滞在することになった。

その時に作った俳句が「おちついて死ねさうな草枯るる」

「おちついて死ねさうな草萌ゆる」という形で自分の心境を俳句にしています。

わたしたち松山人は、松山にやって来た山頭火を、大変好きで愛しております。

森

山頭火には門外漢ではありませんけど、パネラーとして招いていただいて有難く思っております。

種田山頭火も尾崎放哉も、萩原井泉水が主宰する自由律俳句誌『層雲』の仲間です。山頭火の『層雲』初出句は大正二年三月、一方放哉は大正五年の十二月です。年齢も三つ違いますが、層雲に入ったのも三年違いますが、一般世間では漂泊の俳人として並び称されています。二人は直接的には出会うことは生涯一度もなかったわけですが、お互い意識していると言うことは間違いないと思います。

富永

みなさんこんにちは。富永鳩山です。

私は本来書道家として、書を書いているうちに山頭火の句を書くはめになった。山頭火の句をなんとか僕らしい書き方ができないか、そして山頭火は何を考えてこの句を作っているのだろうか、ということを考えて、当時新聞記者だった窪田耕二さんと私が山頭火研究会を昭和五十四年に作りました。市役所では山頭火は乞食坊主というので、ものすごい評判が悪い、その当時はそんな状態です。やっぱり当時防府の人はほとんどそういう山頭火に対する認識、乞食坊主と言われている。種田家が大種田と言われている時代に生まれたのが山頭火。それが、家が没落したために、乞食になったというところが非常に裏で言われるようになったそうです。



しかし研究会は仲間がどんどん増えまして、平成になりました。山頭火ふるさと会と正式に名乗って(会員を)全国から募集しようじや

ないかということになりました。それからだんだん全国に発信してきますと、大変な人数になりました。僕が知っているのはだいたい三五〇人くらい、全国から会員になっています。そうしてなんとか今日まで山頭火の顕彰をしています。

西田

いよいよ本題に入っていきたいと思います。まずはなぜ山頭火が旅に出るようになったのか、ふるさとを離れることになったのか、そのあたりを中心に、鳩山先生、お話をさせていただきますでしょうか。

富永

山頭火は大種田の長男、だけど大学まで行きました。のちの早稲田大学になるんですけども、そこへ行ききましたら、実は種田家だんだん難しくなってきた。で、土地をどんだん売っていききます。それで、とうとう山頭火は防府の実家に帰って来ます。それが明治三十七年です。最後の土地を売ったところで、大道に造り酒屋を作るように移転します。それで大道の造り酒屋を十年がかりでやるんですけども酒が腐ってとうとう種田家が破産するんですね。そのときのことを「幸にして私は破産した」「おかげで私はより我がまゝになることから免がれた」と、破産したことをそういう風に自分で受け止めた。それで、この山頭火が書いた記録の中に、人生は矛盾そのものだと書いてあります。それが山頭火の自分の人生に対する考え方。なにしろ十歳で母親が自殺していますから。この矛盾ということがいっぱいなんだろうかと私は気になっただけで、ずっと大学時代研究していたんですけども、後になってフランスの文学者・哲学者アルベール・カミュが『シーシユポスの神話』という小説を書いている。この中の主題は何かというと、不条理。山頭火は矛盾という言葉で表していますけれども、これはまさしく

不条理。そういうものを背負ったまま生きるわけです。

大正十四年に出家して、大正十五年。自分が修行していた味取観音堂を出てから、一生涯の旅に出ます。ここもよく考えていただきたいんだけど、観音堂を出るともう明日から泊まる場所も食べることも出来ません。それを覚悟で出てきます。そのときに、みなさんよくご存じの、

「分け入つても分け入つても青い山」

というのを旅の第一歩で作っています。このときに、その句に前書きというものを付けておきます。

「解くすべもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た」

「解くすべ」がないんです。つまり不条理をそのまま背負っているんですね。のちに死に場所を求めて旅に出ますけれども、結局は山頭火は最後まで生きる。不条理というものが人生そのもののだということをはじめから、子どもの時から分かっているんですね。不条理を生き切るわけです。

西田

不条理という言葉が山頭火の旅のひとつのキーワードとして出ました。尾崎放哉も山頭火とよく似て得度もしましたし、最後は小豆島で孤高の最後を遂げています。森さんには尾崎放哉のことについて、それから小豆島での山頭火の様子についてお話をさせていただきたいのですが、いかがでしょうか。

森

(山頭火は) 大正十四年三月五日に味取観音堂に入った。放哉が亡くなった大正十五年の四月七日の三日後にそこを飛び出していった。そこ



からまた旅から旅へということになるんですが、その前後の放哉がどうであったか、と言いますと、放哉は大正十二年の十一月二十二日に会社勤めからきっぱり身を引いて、京都の一燈園に入ります。その一燈園から、京都の知恩院の常称院、神戸の須磨寺、若狭の常高寺を転々とし、大正十四年七月、京都の龍岸寺でこき使われて、もう音を上げて、(井泉水に)

「淋しい処でもよいから、番人がしたい。近所の子供に読書や英語でも教えて、たばこ代位もらひたい。小さい庵でよい。それから、すぐ、そばに海があると、尤よい。」

というはがきを差し出したんです。井泉水はそれを見て、小豆島の井上一二に依頼状を出しています。そして八月十一日の夜、送別会で、そのはなむけの言葉に、

「あすからは禁酒の酒がこぼれる」

島へ行つて酒飲んで迷惑かけるんじゃないぞ、そのはなむけの扇子および俳句をしたためていただいて、十二日の夜、小豆島へとやってくるわけです。出迎えた井上一二が詠んだ句が、

「あたままるめて来てさてどうする」

放哉はたいした男です。

「島の小娘にお給仕されてゐる」

ということとはビールを所望したようです。「あすからは禁酒の酒がこぼれる」はどこへいったのか。そして八月二十日、南郷庵へ入ります。気分よく入るんですが、風邪をこじらせます。そこで出た俳句が

「せきをしてもひとり」

それが次々に悪化していつて、最後は結核。大正十五年四月七日に亡くなりました。

亡くなった電報を、井泉水は京都で聞いて、大慌てで小豆島に行くことになりました。そこで京都からフェリーで小豆島へ来るんですが、その連絡船の中で、黒梓の葉書を書いて、層雲の結社の方に配っている。それが分かっているのが、木村緑平、福岡の方。それからも

うひとり、徳山の久保白船という方に差し出している。九日付けです。この黒い葉書は、山頭火にも送っていたのではなからうか。何故かと言ったら、この黒樫の葉書は百枚くらい刷っているわけです。そのうち九日に投函していた中には、この二人は確実に入っているんです。この二人は、大正二年から層雲の結社に入っている。味取観音堂にすっかり定着して一年と一ヶ月、その人の許にこの黒い葉書が渡らないはずがないと睨んでいるのが私なんです。

西田

山頭火は放哉のことを大変気にしておりました。で、全国では今山頭火と放哉、自由律俳句のファンはだいたい二分しています。それほど素晴らしい二人であった。その山頭火は昭和十四年にも二度目の墓参りに、小豆島に行っていますけれども、昭和十四年といえどももう松山でございます。

太田

松山市はやっぱり俳都ということで、正岡子規の顕彰に力を入れていきます。それで、梅原猛が言うには、沢山日本に文学者はいるけれども、松山で死にたいと言って松山にやって来た人は、他に誰がいますかと。松山はいどころだと、松山で死にたいと言った文学者は山頭火よりほかにいないんじゃないかと。もっとも山頭火の思いを、魅力を探ってやらんといけないでしょ、というアドバイスがあったりしました。

今は、昭和二十七年に顕彰会が出来て、一草庵が立て直されて、今我々は山頭火案内人



という形で、松山を愛してくれた山頭火の顕彰を一生懸命しているという状況です。

西田

防府の市民としては、(松山で) そうやって大事にしていただいていけると言うことは、大変うれしいことですし、私たちも山頭火についてもう少し、また考えてみる必要があるんじゃないかと思いました。

後半に入りたいと思います。今回のテーマは旅でございますので、山頭火の旅に焦点を当てたときに、パネラーのみなさんは、どんな思いを持っていらっしやるのか、自由に聞いてみたいと思います。

太田

山頭火の旅は、俳句とともに生きた旅だと思います。山頭火は恐らく、旅に出てつらいことがあるし、やっぱりふるさとに帰りたいと言いう気持ちは常に持っていたと思います。「うまれた家はあとかたもないほうたる」というように自分はもう帰る家がないから旅をするしかなかったんじゃないかという気持ちもあつたと思うんです。

それで、山頭火の俳句を二つ紹介して、山頭火の旅の心をちょっと考えてみたいと思うんですけれど、「やっぱり一人がよろしい雑草」という俳句を山頭火は作っています。それから一年くらいたって、「やっぱり一人はさみしい枯草」という俳句を作ります。その俳句の心を旅まで広げて見ますと、山頭火は旅に疲れたらやっぱり定住したくなるんです。もうひとつ、心に疲れるとやっぱり旅に出たくなくなるんですね。それで、彼は旅に出たんじゃないかというふうに思います。

金子兜太さんも言っていますけれども、人はそれぞれ原郷というものがあって、それがふるさとの大元だと。誰でも生まれてから成

人するまで持った思い、それは胸の中に入っていて、木の香り、花の香り、そういうところに憧れがあつて旅をするんだと書いています。

山頭火の生き様は、本当はやっぱり自分の世界を求めて旅に出て、自分の心の表現の俳句を作りたいと、本当の俳句を作りたいと思つたと思うんですけれども、やっぱり疲れると庵がほしいと、そういう気持ちがあつたのではないかと思っています。

結論は、山頭火の旅は、俳句を作る旅だったと感じています。

森

やっぱり昭和三年、四年は旅。三年に小豆島の寒霞溪にも登っていますし、五日間滞在しています。その感想を旅の途中で層雲に差し出したものです。

「小豆島の五日はほんとうに有難い五日でありました。一二氏玄々子さんのお世話になりました。それにしても生前放哉坊と一杯飲みかわし得なかつたことは残念でなりません。『明日からは禁酒の酒がこぼれる』というお作を思い出しては涙流しました。そして放哉坊は死所を得た。大往生だ。悟り臭くなかつただけそれだけ偉大だつたと思ひました。」

私が一番気に入つたのは、昭和五年の九州の旅です。心温まる、涙流してもいいような、(井泉水による) 文章を読んで終りにいたしましたと思ひます。

「夜は更けたが、話は尽きなかつた。放哉の話も出た。山頭火は放哉には一度逢いたかつた、ほんとうに惜しい事をしたと云う。私もそう思う。此の二人を一度会わせなかつた。而して二人して思う存分に飲んで語らしたかつた。放哉が没した時、其の南郷庵の跡に山頭火を住せしめたいと私は思つて、彼に意向を尋ねた。其の時の返事に、――「私はただ歩いております、歩く、ただ歩く、歩く事其の事が一切を解決してくれるような気がします……先

生の温情に対しては何とも御礼の申し上げようがありません、ただありがとう存じます、然し、悲しいかな私にはまだ落着いて生きるだけの修業が出来ておりません……放哉居士の往生はいたましさと同時に、うらやましいではありませんか、行乞しながらも居士を思いうて、険の熱くなつた事がありました。私などは日暮れて道遠しであります、兎にも角にも私は歩きます、歩けるだけ歩きます、歩いているうちに、落ち付きましたならば、どこか縁のある所で休ませて頂きましょう、それまでは野たれ死にをしてもわたしは一所不在の漂泊を続けましょう」

という事で山頭火の旅は続きます。

富永

今、尾崎放哉の話がございまして、山頭火が放哉をどれほど尊敬していたかみなさんもうご存知だと思います。放哉の句に、「せきをしてひとり」もうほんとうに孤独そのものですね。それに和したかどうかわかりませんが、山頭火の句に

「鴉啼いてわたしも一人」

山頭火の鴉は鳴くんです、ひとりだけれども。山頭火の句というのはほとんどが自然を詠いながら自分を詠う。そこで、山頭火のことと放哉のことをどういふふうに言われているかと言いますと、「歩く山頭火・座る放哉」。それほど山頭火は歩きます。それを歩行禅と、座禅の反対の歩行禅というものを山頭火は日記の中に書いています。

(ふるさとについて) 山頭火は日記の中にどんなことを書いているかと言いますと、「故郷をよく知るものは故郷を離れた人ではあるまいか」

「防府、此地が故郷の故郷だ」決して防府を捨てているわけではなくて、この地がふるさととふるさとだと、防府のことを言っています。決して、山頭火はふるさと

のことを忘れたわけではありません。山頭火は山野だけを歩いたのではなくて、人中に入って、人と会って修行している。要は野や山に逃げたのではなくて、人の中に入っている、お互いに自由律という句を作りながら、一緒に生きようと最後まで大切にしながら、また句友からも大切にされて、生涯を生きたのではないかと思つています。山頭火は生涯の友と生きていったということが、いま放哉さんとか、松山の方からのお話でもよく分かります。

西田

ありがとうございました。

三人のパネラーの方から、いろんな新しい発見、感動もいただいたように思います。

防府市では山頭火のことを乞食坊主と言つた時代もあった、そうして久しいんですけれども、ちょうど今防府市のターニングポイントになっているんじゃないかと思つてですね。山頭火の評価について、今変わるときではないか。山頭火の魅力、さきほどからたくさんのお話が出ましたが、防府市民も、これから山頭火を大事にしていかなくてはいけない、それは私たちだけでなく、今から未来を作っていく子どもたちにもまたそれを伝えていく必要があるのではないかと思つています。

それでは、最後になりますけれども、三人のパネラーの皆様、本日は本当にありがとうございました。皆様方のこれからの活躍をますます祈念しております。

そして、会場の皆さま、最後までありがとうございました。

(参加者の皆様のご協力のおかげで、当シンポジウムは新型コロナウイルスの感染を広げることなく終了することができました。ありがとうございました。)

市内の山頭火頭彰活動

山頭火法要

令和二年十月十一日、山頭火の命日に、防府市本橋町の護国寺において行われました。防府市内を中心に山頭火ファンが集い、没後八十年となる命日に山頭火を偲びました。



没後八十年記念切手贈呈式

令和二年十一月十一日、当館において、山頭火没後八十年記念切手の贈呈式が開催され、当館及び市に記念切手をいただきました。同時に山頭火終焉の地である松山市でも贈呈式が行われました。記念切手は日本郵便株式会社中国支社が制作し、防府市内を中心に山口県内、松山市内でも販売されています。

※当館ミュージアムショップでは取り扱っておりません。



山頭火生誕祭

令和二年十二月三日、山頭火の誕生日に、山頭火生家跡にて生誕祭が行われました。防府市内を中心に山頭火ファンが集い、献酒や献句などを行い、山頭火に思いを馳せました。

俳句には植物や動物、虫などの小さな生き物がよく登場します。この企画展では山頭火をはじめ同時代の俳人が俳句に詠んだ生き物に焦点をあて、句の中でどのような生き物を探りました。また、そうした身近な生き物を通して表現される心情を読み解き、山頭火や自由律俳句の新たな魅力の発見につなげる内容としました。

山頭火の他、萩原井泉水、江良碧松、三宅酒壺洞、河東碧梧桐の直筆の短冊及び掛軸等を展示しました。様々な生き物が作者独自の世界観で表現されており、それらをそれぞれの個性があらわれた筆致でお楽しみいただきます。

展示資料

【短冊】「松にうぐいす川おと雨はれてる」(萩原井泉水)、「色紙」「此梅主の句にあつてさきすきてゐる暖し」(萩原井泉水)、「短冊」「ちりもはじめぬ花の此の日の花に在る」(萩原井泉水)、「短冊」「蟬がしん／＼朝まだき日の雲うごく」(江良碧松)、「短冊」「鎌倉禪ほろびて鎌倉の蟬なく」(三宅酒壺洞)、「短冊」「鳴が北へまゝ飛ぶ水尾の冬の旭」(河東碧梧桐)、「短冊」「煮肴が冷めてゐた芋で打て蠅」(河東碧梧桐)、「掛軸」「大風の風ぎし夜啼くは帰雁哉」(河東碧梧桐)、「雑誌」『層雲』第四巻第五号(層雲社)、「雑誌」『層雲』第二十三巻第六号(層雲社)、「雑誌」『層雲』第二十四巻第一号(層雲社)、「短冊」「とんぼついできてつこらあ
るけば」(種田山頭火／護国寺蔵)、「短冊」「てふてふもつれつつ草から空へ」(種田山頭火／護国寺蔵)、「短冊」「ひっそり暮せばみそさゞい」(種田山頭火／護国寺蔵)

▼展示風景



山頭火力カルタで書き初め大会

日時：令和三年一月九日(土)
参加者：二名

「山頭火いろはカルタ」でカルタ取りをした後、取った札の中から好きな句を選んで短冊に書き初めをしました。今回は大きな絵札を並べ、身体を使ったカルタ取りをしました。カルタと書き初めを通じて、山頭火の句に触れていただく貴重な機会となったことと思います。



短冊に書き初め

▼カルタ取り



消しゴムはんこ作り

日時：令和三年二月十三日(土)
講師：TESCA認定消しゴムはんこクリエイター 藤井哉香さん
参加者：十二名

防府市在住のTESCA認定消しゴムはんこクリエイター藤井哉香さんを講師にお招きして、消しゴムはんこ作りを開催しました。初めて挑戦する方も多く、最初は戸惑いながらのスタートでしたが、皆さん練習から上手に作られていました。講師の藤井さんがデザインされた桜や梅、山頭火の図案をもとに黙々と消しゴムを彫る手が進み、しんと静まる時間が何度もありました。ご自身でオリジナルの図案を作られた方もいらっしゃいました。

はんこが出来ると山頭火の句をつけて絵葉書に仕上げました。一人ずつ発表していただき、同じ図案でもそれぞれ違う個性が表れていました。参加者の皆さんは、楽しい時間を過ごせた、新しい趣味が出来たと喜ばれており、藤井さんもコロナ禍での新しい楽しみになればと話されていました。



▼展示風景



令和二年度山頭火ふるさと館 書道コンクール

募集期間：令和二年八月三日(月)～

九月二日(水)

審査員：小・中・高等学校国語教育研究部の

先生方四名

※表彰式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため未開催

防府市内の小学生から高校生を対象に、山頭火にちなんだ言葉を課題として書道作品を募集しました。部門ごとに、小学校一・二年生の部「やま」、小学校三・四年生の部「からたち」、小学校五・六年生の部「故郷」、中学生の部「山頭火」、高校生の部「山あれば山を観る」から始まる一節を課題としました。応募数一六三九点の中から、各部門最優秀賞一名、防府市長賞一名、防府市教育長賞一名、山頭火ふるさと館長賞一名、佳作二名の計二十五名が選ばれました。受賞者は以下のとおりです。

【小学一、二年生の部】

防府市長賞

三浦華愛 牟礼小一年

防府市教育長賞

丸川隼 佐波小二年

山頭火ふるさと館長賞

野地結菜 中関小二年
古川明和 松崎小一年
山根祐華 華城小一年

【小学三、四年生の部】

防府市長賞

木嶋蓮 佐波小四年

防府市教育長賞

縄本敦子 華浦小三年

山頭火ふるさと館長賞

尾崎風香 佐波小四年
宮川桔平 華城小三年
矢田明希 牟礼小三年

【小学五、六年生の部】

防府市長賞

福田千英 華城小六年

防府市教育長賞

村上茉緒 勝間小六年

山頭火ふるさと館長賞

鮎川愛央 勝間小五年
飯田歩夢 新田小五年
吉田光織 勝間小六年

【中学生の部】

防府市長賞

山下詩瑠葉

山口市立瀨上中三年

防府市教育長賞

境菜々花 右田中二年

山頭火ふるさと館長賞

浅川由衣 右田中二年
伊藤遥 桑山中一年
加納愛 桑山中三年

【高校生の部】

防府市長賞

柳実優 防府高等二年

防府市教育長賞

桑原寛香 防府高等一年

山頭火ふるさと館長賞

濱田百果 防府商工高三年
井上叶羽 防府高等一年

田中亚実 防府総合支援学校高等部二年

山頭火・自由律句講座

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、今年度は十月からのスタートとなりました。

山頭火を学ぶ会

令和二年十月および令和三年一月より三か月 にわたって毎月一回開催

「旅」をテーマに、護国寺の橋本隆道住職による「山頭火の俳句を読む」、当館館長による「山頭火と井上井月」、当館学芸員による「山頭火の俳句を読む」の三回シリーズの講座を実施しました。

自由律句を学ぶ会

令和二年十月十四日より原則毎月第二水曜日開催 全六回

事前に作成した自由律句を持ち寄り、講座生同士で講評し合う会です。本講座も三年目を迎え、互いに励まし合いながら俳句作りに励んでおられ、毎回和気あいあいとした雰囲気で開催しています。

自由律句で遊ぼう

令和二年十月二十四日より第四土曜日開催 全六回

小中学生を対象として、全六回開催しました。山頭火の一生を学び、自由律句を作るほか、紙しばい「種田山頭火のものかたり」の発表をしました。



展示風景▶▶



▼紙芝居の発表



第三回山頭火ふるさと館 自由律俳句大会

募集期間：令和二年五月一日（金）

十一月三十日（月）

審査員：富永鳩山（「群妙」主宰）

久光良一（俳人）

門田美和子（自由律俳句講師）

西田稔（当館館長）

※表彰式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止いたしました。

第三回となった自由律俳句大会では、六か月の応募期間で全国各地から計四一九九点（一般の部二三二六点、子ども部一八八三点）の作品の応募があり、その中から十四名が受賞され、入選は一五八句が選ばれました。受賞作品は次のとおりです。なお、入選作品は当館ウェブサイトに掲載しております。

【一般の部】

最優秀賞

陽の匂いこぼさぬように両袖を畳む

東京都 山田立美

防府市長賞

ひとりひとりの雨を歩いてゆく傘

東京都 本山麓草

優秀賞

手のひらに椿ため息ほどの重さ

福岡県 碧井文果

佳作

寂しいと言えない母を一人置いて立つ

神奈川県 下村修

夜汽車が明日を連れてくる

北海道 刹那

働いて働いて非正規は終わる

宮崎県 永田順市

想い出まで具になる母のいなり寿司

大阪府 中山紗絵

寂しいと言えない寂しさに生きる

京都府 松本俊彦

【子どもの部】

最優秀賞

海に消されずずっと続く一人の足あと

山口県 中2 清水琳世

防府市教育長賞

あの時の涙が前を向くやじるしに

大阪府 中1 渡辺里沙

優秀賞

ひいばあちゃんががんばってるからがんばろう

鳥取県 小4 荻野唯

佳作

空向かい咲くひまわり夢ふくらむ

岐阜県 中3 猪野里帆

空の弁当箱には愛がある

岐阜県 中3 服部隼弥

川の向こうに遊園地があったらいいな

山口県 6歳 藤田美月



展示風景▶▶



私と自由律俳句

久光 良一

明治四十四年に創刊された句誌「層雲」に集った俳人たちの中で一際活躍が目立ったのが、種山頭火、久保白船、江良碧松の三人で、この三人は「層雲の周防三羽ガラス」と並び称されていた。

この中の一人江良碧松は私の住んでいる田布施町の人で、その碧松が創始した「一夜会」を引き継ぐ「周防一夜会」が今も活動を続けています。私がこの会に入ったのは平成四年のことで、それまでは山頭火のことは少々知っていたものの江良碧松のことはまったく知りませんでした。しかし会に入ってからいろいろ調べた結果、江良碧松の偉大さを知ることになり、自由律俳句のすばらしさにひかれるようになりました。

私が入った当時、選者として指導してくださっていたのが近木圭之介先生でした。近木先生は山頭火と親子のように親しく交流しておられた方で、あの有名な山頭火の後ろ姿の写真を撮られた方です。先生は自由律俳句というものは常に革新的であらねばならないという強い信念を持っておられました。

私たちは先人の句そのものを模倣しがちですが、先生は句を模倣するのではなく、先人たちの革新の気概を継ぐことこそが大事であると考えておられたのです。

とかく私たちは安定を求める傾向があるため、先人の作った句の作風を真似た一つの世界を作ってしまう、その中で安住し安心してしまふところがあります。それは結局新しい定型の世界を作ってしまうということになるのではないかと、このことを感じておられ、それを打ち破ろうとしておられたように思います。

先生の句は詩的であり、いつも新鮮でした。今は亡き先生のおんなお気持ちをお忘れることなく、私はこれからも新しい句の世界を創造する努力を続けてゆきたいと思っています。

植田莫展

会期：令和二年十一月五日(木)
令和三年二月二十日(土)

山頭火句からイメージした絵を描いた植田莫氏の作品展第二弾を市民ギャラリーにて開催しました。

展示資料

- 【版画】「色づく路」へ句 一人が行く影が濃く
- 【版画】「輝く山里」
- 【版画】へ句 風の中声はりあげて南無観世音菩薩
- 【版画】「コスモス」
- 【版画】へ句 何を求める風の中ゆく
- 【版画】「雪あるき」



収蔵資料紹介

太田蛙堂による池原魚眠洞宛て葉書を紹介します。

- 凡例
- 一、旧字体は新字体に改めた。
- 二、適宜句読点を補った。

表 (消印 飯田・昭和九年四月二十九日)
愛知県津島町の堂 池原魚眠様
長野県下伊那郡飯田吾妻町二 太田蛙堂
四月廿九日朝

裏
わけて御心痛になられました山頭火翁も昨廿八日朝九時退院いたされました。私宅にて一二日の御静養をお進め申上げましたが翁は一路帰庵した方がよろしいといふので万端を整へ十二時飯田桜町発辰野乗りかへ名古屋下関直行で御帰りになりました。途中或は一夜泊るかもしれないといふて居られました。御知らせして置ます。

解説

太田蛙堂は長野県飯田の、池原魚眠洞は愛知県津島の『層雲』同人。
昭和九年三月、山頭火は小郡の其中庵から旅に出た。途中愛知県では魚眠洞に会い、その家族と共に過ごした後、木曾路に入り長野県の伊那を目指す。しかし、飯田で太田蛙堂に会った際に肺炎を患い、一週間ほど入院してそのまま其中庵へ帰ることとなった。
この葉書は、山頭火が退院し飯田を去った

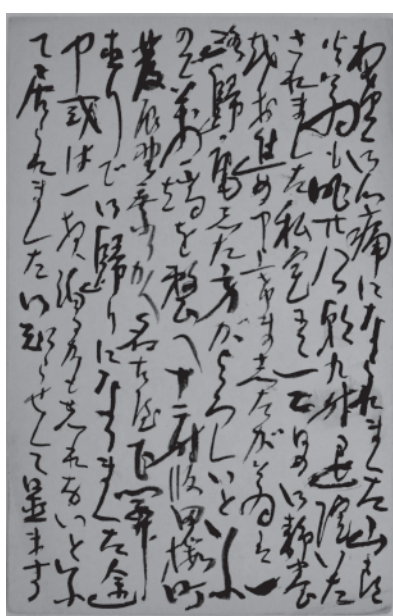
後に、蛙堂が魚眠洞に山頭火の動向を知らせるために送ったものである。なお魚眠洞宛て書簡は、昭和九年四月二十六日付のものもあり、紙面の都合上今回は割愛するが、こちらでは山頭火が肺炎を発症してから退院に至るまでが非常に詳しく書かれている。

この時期の山頭火の魚眠洞宛て葉書については館報五号で紹介しているが、四月二十八日付の次のような葉書がある。

「御心配をかけましたが、やうやう汽車に乗れるやうになりました、いづれ帰庵しましてか
らまた、
浜松宛に御手紙いただきました」

この文面は、魚眠洞が既に山頭火の状況を知っていたような言い方であるが、太田蛙堂から連絡が行っていることを考えれば不自然なことではない。

蛙堂は山頭火が肺炎を患ったとき、その世話に奔走し、師の萩原井泉水や、魚眠洞以外の『層雲』同人にも山頭火の様子を詳しく伝えていた。山頭火自身はこの頃の日記をほとんど記しておらず、飯田での山頭火の様子は、太田蛙堂が残したものによって知ることができ



今月の一句 アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和二年

九月 このいただきに来て萩の花ざかり

昭和五年九月十七日

それまでの日記を焼き捨てて再び旅に出た際に詠んだ句です。萩の花は好きな花としてよく詠んでいます。山頭火にとって旅は自分の中に抱えたものを解き放つための手段でした。ただ、その解放が簡単なものではないこともわかっていました。そうした苦しい思いに突き動かされた旅で好きな花を目にすることは、大切な安らぎだったのではないでしょう。

十月 誰もみないでコスモスそよいでゐる

昭和五年十月四日

「みないで」と「そよいで」の似た音の言葉により、句にリズムが生まれています。「誰もみない」には山頭火の孤独が感じられ、人の気配のないところにコスモスがそよぐ景色で静けさが際立つため、一見さみしい句のようですが、無人だからこそコスモスに寄り添われているような、孤独の中にも希望が見られます。

十一月 ほろほろほろびゆくわたくしの秋

昭和十四年十一月

四国八十八ヶ所を巡る旅の途中に詠んだ句です。この旅の後、松山に「一草庵」を構え、約一年後に亡くなりました。秋を詠んだ山頭火句は多くありますが、この句では自分の人生の「秋」を詠んでいます。そこには秋の落葉のような、静かな人生の終わりがイメージされているのかもしれませんが。

十二月 生きてゐることがうれしい水をくむ

昭和九年十二月二十四日

この年の春の旅で肺炎を患い、一週間入院する事態になったことで、山頭火は自身の衰えを感じるようになります。体の弱りから「死」を意識しつつ、それゆえ生きていることを実感したのでしょう。「いつでも死ねる」という覚悟を持ちながら「生」を味わう山頭火の、水を汲んだときに感じた「生きてゐる」という実感がストレートな言葉で表現されています。

令和三年

一月 水仙いちりんのお正月です

昭和六年一月一日

昭和五年九月からの旅で九州を一周した後、年末には熊本に戻ります。十二月二十五日に貸二階を見つけると、そこを「三八九居」と名づけて住み始めました。元妻のサキノのところに足を運ぶこともあったようですが、人との関わりに疲れ、一人静かな時間を過ごしたいとき、傍らに咲く水仙がその穏やかさを守ってくれていたようにも感じられます。

二月 梅もどき赤くて機嫌のよい頬白目白

昭和九年二月十九日

北九州近辺への短い旅に出た日の句です。沈みがちで落ち着かない気持ち切り替えるための旅でした。友人と会ったり山を歩いたりしてリフレッシュされたのでしょう。句には明るさがあります。自然の中に身を置き、枝をわたる小鳥の様子や色鮮やかな木の実を目にしたことで明るい気持ちを取りもどしたようです。

三月 旅出

春風の吹くまま咲いて散つて行く

昭和十三年三月四日

春は多くの植物が芽吹き、花を咲かせて散つ

ていきます。句は、そうした自然の流れを描写するとともに、人が生きる姿を俯瞰しているようにも受け取れます。またこの時期になると、山頭火はよく旅に出て句友にも会っています。それは自身を浄化するためでもあったようです。いずれは散つていく人生であっても、春風に突き動かされるように旅に出ては、友に会うことで自分を取り戻すことを繰り返していたようです。

図書・資料受け入れ報告

二〇二〇年度に寄贈いただいた資料の一部をご紹介します。

寄贈

小山貴子氏より『青穂』第三六、三九号、田原覚氏より『山頭火全集』全十一巻（春陽堂書店）他三点、（株）春陽堂書店永安浩美氏より『新編山頭火全集』第一巻、古川富章氏より『文芸山口』第三五四号（山口県文芸懇話会）、町田珠実氏より『秋山巖木版画集』88（秋山巖）、水落龍勝氏より『二曲屏風』山頭火句・圭之介句（近木圭之介）他九点、森克允氏より『光友』六六九号（一燈園全国光友会）、鰐石尚子氏より『植田莫作品集山頭火と歩く風を染め心を描く 山頭火句抄絵集II』（植田莫）

御著編書

小玉石水氏『晩秋の言葉集 第二十集』、田原覚氏句碑写真二、五九七点他一点、富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』二八号他二点、中原中也記念館様『中原中也研究第二十五号』、西本正彦氏『秘すれば花なり』他二点

この他多くの図書・資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。

山頭火ふるさと館 これまでの歩み

山頭火ふるさと館は二〇一七年十月に開館し、公益財団法人防府市文化振興財団が運営してきましたが、二〇二一年四月からは、運営団体が一般社団法人防府観光コンベンション協会に移行することとなりました。
これまでの山頭火ふるさと館の歩みを振り返ります。

二〇一七年度

- ◆十月七日 開館!
- ◆開館特別企画展
「山頭火の句名筆特選 百年目のふるさと」
- ◆コレクション展示 「山頭火の「旅空」」
- ◆企画展「山頭火とふるさと防府」

二〇一八年度

- ◆企画展「山頭火と定型俳句」
「初期の創作活動を探る」
- ◆特別企画展「山頭火を囲む人々」
- ◆企画展「常識を打ち砕け!自由への誘い」
「自由という名のルール」
- ◆企画展「淡きこと水の如し」
「山頭火の愛した水」
- ◆企画展「うしろすがたが見つめた先に」
「山頭火の一人旅」

二〇一九年度

- ◆コレクション展示「山頭火を書いた現代人」
- ◆企画展「自然を詠む」
「山頭火のまなざし」
- ◆企画展「周防三羽鳥」
「山頭火と白船・碧松」
- ◆十一月十六日 入館者五万人達成!
- ◆企画展「山頭火の書」

二〇二〇年度

- ◆企画展「響き合うことば」
「山頭火句の広がり」
- ◆山頭火没後八十年記念企画展
「旅を記す」
「山頭火からの便り」
- ◆企画展「俳句の中の生き物」



▲山頭火を学ぶ会



▲山頭火の書



◀周防三羽鳥

他にも講座「山頭火を学ぶ会」「自由律句を学ぶ会」「自由律句で遊ぼう」を開催したほか、書道コンクール、自由律俳句大会、フォトコンテスト等を実施。
多くの方に山頭火や自由律俳句に触れていただく事業を開催してまいりました。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時から午後六時
(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)
休館日
毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)
十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料
※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅でんじんぐちから約一・五km
まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m
山陽自動車道防府東・西ICより約七分
駐車場
普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)
無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第6号
令和3年3月31日発行

編集・発行

(公財) 防府市文化振興財団
山頭火ふるさと館
〒747-0032
山口県防府市宮市町5番13号
電話 0835-28-3107
FAX 0835-28-3113

印刷

大村印刷株式会社
山口県防府市西仁井令一丁目21番55号